柏樹

題字
淺香正男会長
川口市退職校長会
会報 第１０号
平成２７年２月１日

何でもいいよ

横田　保

「どっちが似あうかしら？」と、妻がデパートの婦人服売り場で聞いてくる。こんな時わたしは、彼女がそれをまとって出かけた先で、人からどう見られるのかを想像して応える。色あいは地味すぎないか、デザインがやぼではないか。試着室について行き、こう答える。

「うん、最初の方がいいね」

こう答えるなら、満点亭主の評価をもらえるに違いない。でも、現実はそうはいかない。

時おり、連れ立って出かけたとき、夫である私が「いいお召し物ですね」と、妻が言われる場面を思い浮かべて少しでも品のある夫であると見られるかな？ということに思いが至らない。自分の好きでいいじゃないか、とも思う。だから、生返事をする。

まあ、そこは何とかクリアして、昼どき過ぎのレストランに行くことになる。

「何を食べようか？たまの外食だから奮発しようよ」という彼女。

「何を食っても同じだよ。何でもいいよ」という私。心躍らせて、今しがた気に入った洋服を手に入れた彼女の気持ちを推し測ろうともしない。わたしの一言が相手のはずんだ気分を一気になえさせてしまうことなどお構いなしだ。その上、「空いた所へ入ろう」なんて最低の言葉をのたまう始末。聞かれたことに向きあっていない自分に気づかない。こうなっては、空気も同然、水も同然である。空気も水も生きる上で必須の存在である。それなのに、感謝の一片もない。こんな日々が続く限り、夫婦の会話など成立する訳がない。会話がなければ、相手が何を考え、何を要求しているのか分からない。分からないから少しのことで、諍いが起こる。そればかりか、己が男であることに気が回らない。そして、妻が女であることにも気づかない。

生まれたからには、生涯、男を全うしたい。妻には女であって欲しい。そう願うなら、「どうでもいい」「何でもいいよ」を禁句にしませんか？

戦友に対する思いやりとして。

公職を離れて

副会長　神山則幸

昭和48年4月川口市立元郷中学校の数学教師として奉職し、平成25年3月に川口市教育長を退任するまでの、ちょうど40年間教育に携わってきた。

教員採用試験に合格し、大学卒業後に夢多き青年教師として教職の道を歩き始めたはずであったが、終わってみれば学校勤務は18年、後の22年は教育行政勤務と行政経験のほうが長くなってしまった。

「教育行政の仕事は、学校籍の誰かがやらなければ、安定した学校教育はできない」と勤務場所が変わるたびに上司から言われてきたが、子供が好きで教職の道を選んだ私にとっては、いささか不満の残る思いはあった。しかしながら、与えられた仕事は精一杯やり遂げたという自負もある。

そんな公職を離れて、最初に目についたのは手帳であった。3月までは予定がぎっしり詰まり真っ黒だったが、4月以降は真っ白で、いささか拍子抜けした感はあったが、ようやく解放されたという安堵感に浸ることが出来た。

今は、柏樹会の諸行事に参加することが楽しみのひとつになっている。多くの先輩や同僚と昔話に花を咲かせたり、教育を語り合ったりしている。「いくつになっても教育と教養は大切」といっても、今更、難しい勉強をすることではなく、「今日行くところがあること、今日用があること」が年を重ねず年を取る、すなわち若返る秘訣であると聞いている。

教育界では、目前に迫っている少子化とグローバル化に対応するために「教育再生実行会議」が様々な教育改革の提言を行っているようであるが、そもそも「教育再生」という用語が気に入らない。「再生」とは、死んだものを生き返らせることである。教育は死んだことなどないと信じている。今行われている学校教育がより良いものになるような提言であってほしいと願っている。リタイア生活を楽しむ中、年金の行方を心配し、孫と一緒に「公園活動」に汗しながら、岡目八目で、親しんだ教育界の動向を見ていきたい。

―ちょっといい話―

教員養成の現場

桑原憲一

定年退職後、東京学芸大、獨協大学、東京農業大学などいくつかの大学で教職課程の講義を担当させていただいています。

近年、免許取得者の教職就職者数が極めて低いことや教員養成の質的向上を図る観点から免許法の改正が進められています。教育実習の充実、福祉施設での介護体験と特別支援学校での実習、4年間の教職課程の履修を総評価して実践的指導力を育む教職実践演習などが課せられています。また、免許取得の基礎要件を学部卒から院卒にするという動きもあります。来年度からは教職課程指導教員の情報、教職就職者数などを公表することが各大学に義務付けられます。教員採用試験の合格者がゼロという大学も数多くあり、教職科目の大学教員の指導レベルに驚くこともあるのでこうした改革も致し方ないのかなと感じています。

さて、ちょっといいお話をさせていただきます。毎年、履修学生に教職志望動機を聞いています。「教える喜び」「子どもの成長へ寄与できる喜び」「自分の専門や特性を子どものために生かしたい」「祖父母兄姉が教職」などがあります。しかし、毎年一番高い比率を示す動機は、「中高時代の恩師の影響」です。教職退職者としては嬉しい限りです。恩師と慕われ、尊敬されている多くの先生方に心から感謝し、敬服いたします。

しかし、その反面、毛沢東が言った、正に「反面教師」を理由に挙げる学生も毎年います。「ひどい指導を受けた。ひどい教師だった。だから絶対に自分は教師になる」というものです。こうした学生には頼もしさを感じます。

最近、学生の感性の豊かさに心揺さぶられた教職希望の動機を紹介します。

「猫・兎カフェで働いていた時、お母さんのお膝の上で撫でられていたポワールちゃんを隣に座っていた小2ぐらいの男の子が、『これ、もういらない』と言って、私に突き出しました。うさちゃんを『これ』、『いらない』と物のように扱う男の子、思えばお母さんも『これ』と言っていました。私はポワールちゃんをゲージに戻しながら涙が止まりませんでした。その一年後、スウェーデン留学から帰ってポワールちゃんが亡くなったことを知りました。

私は、あの母子を思い出し、教師の仕事を通してぬくもりとやさしさに溢れた人づくりに関わりたいと強く決心して教職を目指しました。」と。

初任者と共に

石田拓喜

私は退職後、再任用として初任者の指導に当たってきたが、まもなく5年間が終わろうとしている。退職を迎える頃、もう一度「授業」というものを勉強し直したいという思いから、この道を選んだ。38年間の教職生活の中で、教室で授業をしたのは20年間しかなかった。

再任用は、退職した日の翌日から始まり、退職気分はなかった。それでも、職員室の自分の席で今までとは逆に管理職の方を向いて話を聞く時や、書類の職名欄に「教諭」と書く時は、何かほっとするような気持ちになった。

初任者研修では、初任者と一緒に教材研究をし、指導案を練り上げる。初任者に助言すべき授業の基本は何か、工夫したい学習材や教師の言葉は何か、児童の実態はどうかなど、初任者から問題をもらっては自分の勉強の糧とした。そして授業の実際を基にまた考える。この工夫と現実の過程が面白く、これが私の望んだことであった。

図工の題材「ゆめいろらんぷ」で使う参考作品をつくる時であった。材料のペットボトルだけでは形が決まってしまうと思い、近くのコンビニに行ってみた。食品棚を見ると、実に面白い形のケースがあった。その中からサラダを買ってきた。放課後、初任者と一緒にサラダを食べ、空いたケースでランプをつくった。新しい形のランプがいくつかできた。これを暗い所で明かりをつけ児童に見せたいと、学校中を回って場所を探した。こうして授業の最初に見せたランプの美しい光に、児童はどよめくような歓声をあげた。

給食は初任者の教室で児童と一緒の班で食べた。たわいもないことで話が盛り上がる。「夏と冬、どちらが好きか」「ゴキブリとヘビ、どちらが好きか」「クラスで一番こわい女の子は誰か」―その班は食べるのが遅くなり、担任の初任者に注意を受けることもあった。それでも「先生、話しかけないでね」と言っては小さな声で話しかけてくる。退職しても、直接児童と触れ合うことができるのは、なんと楽しいことか。

この5年間で勤務した学校は10校、出会った初任者は21人になった。先日、2年目を迎えた3校の初任者5人と飲み会を開いた。みんなたくましくなった。何でも訊きなさいと言われた1年目は訊くことが分からなかったけれど、2年目は訊きたいことがいっぱいあるとの思いは共通していた。話は尽きなかった。

人権教室・出前授業

安倍保夫

退職後４年目（65歳直前）、その存在すら知らなかった「人権擁護委員」（法務大臣委嘱）として奉職することになって６年が経過しようとしています。川口部会は18人の委員で活動しています。私が委員になったときには既に校長を退職された、野島先生、島谷先生、平野先生、南先生が活動されていました。

最初の話では、主に電話での人権相談が２か月に１回くらいと聞いておりましたが、委員研修や啓発活動が活発なのに驚きました。川口市内でも人権に関する関心が高まり、学校や公民館からの人権教室（講座）の要請が多くなっています。要請を受けると担当者が中心となり、いわゆる「出前授業・講座」を行います。

そこでは、まず人権擁護委員の存在を知ってもらいます。次に、寸劇をしたり、ＤＶＤを使ったり、紙芝居を使ったりして、人権について考えを深め、強い意識付けを図ります。一人一人の人権が尊重され、皆が幸せに生活できる平和な社会づくりが究極の目標です。相手を思いやる心を醸成し、さらに自己の人権をも大切にする、つまり自己実現へのステップになればとも思っています。

しかし、70億人を超える人が住む地球では、戦争を初めとする殺伐とした事件や人権侵害が絶えません。全て人権意識の欠如が起因していると思います。ノーベル平和賞の17歳の少女、マララさんの「女性に教育を！」のとおり、教育の力をもって世界の・人類の最も崇高な目的＝一人一人の人権が尊重された平和な世界＝が実現してほしいと思います。

そのほかに、人権擁護委員が学校に出向くのは、小学校では「人権の花運動」これは国の予算で、子供達に、花を愛でることによって思いやりのある優しい心を育む運動です。児童や先生、保護者などと一緒に花を植え、育てて校内に飾って多くの人に見てもらったり、近くの福祉施設に贈ったりしています。

中学校には人権作文の応募を依頼し、ご協力を頂いています。人権作文を書くことによって人権について考え人権尊重の精神を培ってもらうことを期待しています。

生涯学習部、学校教育部とも連携する活動もあり懐かしい再会もあります。

鳩ヶ谷の教育支援

～広がり、つながる活動を～

田代博人

埼玉県退職校長会ニュースレター11号に川口班の活動報告が載っている。教育支援として『授業参観、学校公開、研究発表等には学校に赴き、助言、励まし支援する』と報告されていた。他市には見られない特色ある活動である。

鳩ケ谷地区の研究指定校である八幡木中学校、鳩ケ谷小学校の研究発表会には、鳩ケ谷地区の退職校長先生方も参観されていた。講話は、本会会員である並木茂夫先生、荻原邦昭先生であった。嬉しいことである。鳩ケ谷小では、国語、学活で子供達が自分の考えを文章や生活経験を基に伝えたり、受けとめたりしていた。先生や子供達の言葉や表情に教育内容の充実を感じることができた。

私も現職のとき、退職校長先生方に訪問していただき先生方や子供達に声をかけてもらい励みになったのを覚えている。参観や指導が広がり、みんなで川口の子供達を育てるという支援が広がることを願い活動したい。

もう一つは若手教員の育成支援、鳩ケ谷市で10数年前から実施され、成果を上げていた。「若手教員研修」を生かした支援である。

地元の小学校の「二年次研修」にかかわって３年になる。

「先生、国語の勉強にしてもらえませんか。学習課題は分かっています。勉強の仕方もわかっています。ノートは・・・のように書きます」先生が急用で休んだ学級の児童の言葉である。求められている意欲的な学び、児童主体の言語活動の充実を現している姿である。一寸した支援で若手は伸びる。

また、当時の若手教員研修国語部会は、「川口国語研究会」としてつながり、参加者は新たなメンバーも加え20数名、異動により川口・草加・蕨などの各校に広がっている。会の指導は会員の「埼玉県はつらつ先生」２人、私は顧問として支援している。現在の課題に向き合い、充実した研究を実施している。若い先生方の学びたいという思いは強く「若手教員に期待する」「被災地福島の学校」「フランス語で演じるピノッキオ」等々、退職、現職校長先生方の講話を行っている。「川口の子供達に力をつける」ために、教育支援が広がることを学校、若手の先生方は期待している。

退職校長会としてできる教育支援を今後も続けていきたい。

理科離れを防ぐ

川口市立前川東小学校長
加藤　裕

「理科離れ」がささやかれ始めてから10年余りになります。きっかけは２００３年に国際教育到達度評価学会が実施した「国際数学・理科教育調査」です。それによると日本の児童生徒は成績が良いのにもかかわらず、理科が楽しいと思う児童生徒が国際平均より中学生では25ポイント、小学生でも10ポイントも低かったとのことです。さらに①国民全体の科学技術・知識の低下②若者の進路選択時の理工離れと理工学生の学力低下③②の結果として次世代の研究者・技術者が育たないことなどが問題視されています。

こんな中、川口市では、現在３校ある市立高校を新高校に統合し、現在の川口総合高校の場所に建設すると発表されました。新校は県内有数の進学校を目指し、普通科の他、理数科が誕生し、開校は平成30年４月。ということは、現在の小学校６年生が第１期生ということになります。

そこで新校と同じ地区にある本校の理科教育の現状について述べたいと思います。本校では、かなり以前から理科専科が置かれていて、専科による専門的な指導がされていました。しかし、担任が理科を指導する機会が大幅に減少するなど、マイナス面が見られました。これでは、理科に関する指導力の向上は望めず、異動した際に理科を持つことを負担に感じてしまうことでしょう。平成22年度の「小学校理科教育実態調査」によると、教職経験５年未満の教員で、理科の指導が「得意」「やや得意」と肯定的に回答しているのは49％にとどまっているという調査結果もあります。理科離れは、もはや教師の理科離れです。

以上のことから本校では、昨年度より理科授業は担任が行い、校内研修教科を理科とし、平成25・26年度川口市教育委員会研究委嘱を受けました。

以下本校の研究の概要です。

○研究主題

『楽しい授業の創造～生活科・理科を通して～』

○主題の分析

児童にとって「楽しい」のは、『児童が主体的に学ぶ（①新しいものに出会う②活動する③わかる）とき』

○仮説１

『児童自らが問いを見出す導入の工夫をすれば、児童は見通しをもって、主体的に活動することができる』

○仮説２

『児童の願いや考えを重視した授業展開をすれば、児童は意欲をもって、よりよい問題解決をすることができる』

これらの具現化に向け、25年度より検証授業を行ってきました。

○成果

・児童へのアンケートでは、「理科の授業が楽しい」と答えた児童は１年前と比較し、15ポイント上昇しました。特に低かった「予想を立てることが楽しい」についても80％に達しました。

・児童に驚きや疑問が生じ単元の導入を工夫することで、単元全体を通して意欲的に活動することができました。

・児童の思いや願いを大切にする授業展開をすることで児童は主体的に取り組む意欲が高まりました。

11月25日に研究発表会を実施し、雨天にもかかわらず多数の参加者を得て、有意義な研究発表会となりました。

編集後記

様々な思いのこもった玉稿、誠にありがとうございました。

川口市内の中学校で開催されています「ふれあい講演会」に数校の校長先生から依頼され、５限目の50分、全校生徒に向け、講話をしました。タイトルは、『できるできるやればできる、やる気があれば必ずできる』です。生徒一人一人が少しでもやる気が出て、元気な中学校生活が送れるように、心をこめて、実践の一端を話しました。

６時間目に書いた感想文を読むと、印象に残った言葉や漢字も多く、真剣に聞いてくれていて、「文は人なり」の通り、生徒一人一人の心のうちが映し出されていて、胸が熱くなりました。

中学生に情熱をもって指導している校長、先生方、素晴らしい限りです。

（山下紘一）